



Title	サルデーニャ民話考 : 閉じこめられる娘
Author(s)	井本, 恭子
Citation	AULA NUOVA イタリアの言語と文化. 2004, 4, p. 103-117
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93555
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

サルデーニャ民話考

— 閉じこめられる娘 —

井 本 恭 子

はじめに

イタリア各地で民間伝承の採集がさかんになり始めたのは1860年代である。その後30年の成果はシチリアやトスカナなどの地域レベルの民話集をはじめ、「イタリア民間伝承誌」(1893-1895)、「民間伝承研究のための採集資料」(1882-1909)などの全国的な広がりをもつ雑誌や叢書の刊行となってあらわれた⁽¹⁾。なかでもコンパレッティの『イタリア民話』(1875)⁽²⁾は、はじめて民話の聞き書きが全国的に行われた画期的な仕事である。残念ながら刊行は一卷のみで、コンパレッティのもとに届いた手稿の多くは、ローマの国立民芸・伝承博物館の図書館所蔵「コンパレッティ文庫」⁽³⁾に眠ることになった。

この「コンパレッティ文庫」にはサルデーニャ民話の手稿もかなり多く含まれている。それはコンパレッティの弟子パイスが中心となって集めたもので、カルヴィーノの『イタリア民話集』に収められた数篇⁽⁴⁾を除けば、これまで門外不出であった。サルデーニャの民話はこのまま永い眠りについてしまうのかと残念に思っていたら、デリタラの手により『19世紀のサルデーニャ民話—「コンパレッティ文庫」の手稿編纂—』二巻本にまとめられ、埋もれていた105の民話に光が当てられたのである。

デリタラ篇をみれば、採集地はサルデーニャ中北部の村とサッサリ市、インフォーマントは「年配の女性」「サッサリ近郊の年配の農夫(女)」と示されている以外は、ほとんど明記されていない(サッサリに住むコドロンジャヌス村出身のヴィンチェンツァ・マンカ・ピラスが唯一の固有名詞)。もちろん民話はすべて土地の言葉で聞き書きしたものばかりであるが、19世紀の採

集は緻密とはいいがたい方法で行われていたようである。しかし不思議なことに、最近の採集記録の話型分類の結果と同じように、本格昔話が全体の8割以上を占め、なかでも魔法昔話が圧倒的に多く（48話）、笑話小話（18話）やキリストと聖ペテロの巡行（6話）は広範囲に分布している⁽⁵⁾。時間からも空間からも自由な民話の形式は、思ったより厳格な法則に支配され、その不動性を保っているようである。

さて、「コンパレッティ文庫」の紹介が長くなってしまったが、本稿の目的はヨーロッパに広く分布する「塔のなかの娘」AT310に分類される民話を取り上げ、人類学的なひとつの解釈を試みることにある。人間の願望充足、心の成長過程、失われた成人儀礼の回復といった普遍的な解釈に挑むには力不足ゆえ、あくまでもサルデーニャ社会という伝承母体をうつす鏡として民話を覗いてみることにする。「われわれの誰ものなかに、何か農夫的なものや放浪的なものが潜在意識として存在している」とすれば、「昔話というガラス玉のなかに」どのように映しだされているのだろうか。[LÜTHI 1969:144 2001:5]。サルデーニャ社会の固有の論理が潜む民話の世界は深い森のようで、迷いこんだら出られぬ気もするが、混沌のなかの秩序をもとめて、少しだけ足を踏みいれてみよう。

「閉じこめられる娘」をめぐる話

デリタラの『18世紀のサルデーニャ民話―「コンパレッティ文庫」の手稿編纂―』から選んだ二つの話は、ボノ村で採集された Paristoria「昔話」とギラルツァ村で採集された Sa fiza 'e s'Orcu「人喰い鬼の娘」である。この二つはともに、アルネ・トンプソンの話型分類（以下 AT）では「塔のなかの娘」型に分類され、一般的にはバジレーの「ペトロシネッラ」やグリムの「ラプンツェル」という名で知られている⁽⁶⁾。前者は『ロ・クント・デリ・クンティ』のなかで二日目の最初に語られる話、後者は『グリム童話集』第一巻に収められている話である。AT310は「ラプンツェル」を基本とするが、サルデーニャの話はどちらも「ペトロシネッラ」の類話に属する。つまり、

援助者である王子が盲人になって主人公に救われるモチーフのない、人喰い鬼に閉じこめられる娘の話である。少し長くなるがここであらすじを述べておく。

S1「昔話」(ボノ村)

身ごもった娘が泉に水を汲みに行く途中、人喰い鬼 Mamma Orca に会い、お腹の子をわたす約束をさせられる。女の子が生まれ、乳離れするまで家の中で大事に育てられた。人喰い鬼は成長した娘マリアに会い、母親に約束を果たすように伝えさせる。マリアは人喰い鬼の家に連れて行かれ、死者の部屋と負傷者の部屋以外のすべての部屋の鍵と指の太さほどの三本の金色の髪をわたされる。人喰い鬼はその金色の髪をつたってマリアのもとへ登ってくる。ある日のこと人喰い鬼の留守中に、禁じられた部屋から声がきこえ、マリアはそこに人喰い鬼に傷つけられた王子を見つける。マリアは魔法のびんの軟膏を塗って王子の傷を治し、残りの三つの魔法のびんをもって王子と馬にのって逃げる。人喰い鬼は追いかけながら、マリアにふり向くように言うが、王子が禁じる。マリアは魔法のびんを使って洪水をおこし、いばらの茂みをつくり、大火をおこして、迫りくる人喰い鬼をふりきった。人喰い鬼は後生だからふりむいてくれと言い、マリアがふりむくと猫の顔に変えてしまう。王子はマリアを部屋に閉じこめ鍵をかける。ずいぶんたってから、マリアは人喰い鬼のもとに使いをやって美しい顔に戻す軟膏をくれるように頼む。元の顔に戻ったマリアは王子と結婚するが、王に仔犬をうまく育てられるか試される。人喰い鬼のおかげで仔犬はうまく躰けられ、マリアは宮廷に迎えられる。

S2「人喰い鬼の娘」(ギラルツァ村)

ふたりの妊婦がこっそりと人喰い鬼 Orco の菜園からセロリを盗んで食べる。ひとりが隠れていた人喰い鬼の耳をキノコと間違え、引っ張ると

人喰い鬼が現れ、捕まってしまう。その妊婦はお腹の子が女ならば人喰い鬼にわたす約束をさせられる。やがて女の子が生まれ成長すると、人喰い鬼が約束を果たすように娘マリエッタを通じて母親に迫る。マリエッタは人喰い鬼の住むヌラーゲに連れて行かれ、死者の部屋以外のすべての部屋の鍵を渡される。人喰い鬼はマリエッタにその美しい金色の髪を垂らさせ、ヌラーゲにのぼってくる。ある日のこと、人喰い鬼の留守中にマリエッタは禁じられた部屋に入って王子を見つける。魔法のびんを使って王子を蘇らせ、ふたりで逃げる。追いつがる人喰い鬼にマリエッタは魔法のびんを次々と投げつけ、いばらの山、大洪水、火で阻もうとする。人喰い鬼はいばらの山の反対側をとおり、大洪水を呑みこみ、火を吹き消してマリエッタを追うが、投げつけられたオリーブ油のびんに行く手を阻まれる。そのときマリエッタは呪いの言葉をあびて、彼女の顔は猫になる。王子は悲しみ、両親や義姉妹に花嫁を紹介できず、部屋を借りて閉じこめてしまう。ある日のこと王は王子とマリエッタを正餐に招く。マリエッタは「キリスト教徒の顔」に戻し、美しいドレスとたくさんのお金をくれと、王子を使って人喰い鬼に頼む。魔法の小びんのおかげで、マリエッタは美しい顔になり、鈴のついたドレスと仔犬を手にいれ、正餐にでかける。食事中、マリエッタはテーブルの下に隠れていた仔犬に食べものを落としてやっていたが、それがすべて金に変わっていた。義姉妹もまねをするが、それはすべて犬に食べられてしまう。王と王妃は義姉妹を追い出し、マリエッタを快く迎える。

前述の二話を形態的にとらえるために、物語の構成要素、展開パターンという点から整理してみよう。まず物語の構成要素は主人公－娘、敵対者－人喰い鬼、援助者－王子、超自然的な力－自然界に属するもので、「ペトロシネッラ」とほとんど同じである（表1）。ただし、サルデーニャの話では敵対者の人喰い鬼が援助者にもなり、援助者である王子がときには敵対者のような行為におよぶ、という両義性がみられる。「ペトロシネッラ」の敵対者

表1 S1 「昔話」 S2 「人喰い鬼の娘」

AT310	ペトロシネッラ	S1	S2
主人公	娘 Petrosinella	娘 Maria	娘 Marietta
敵対者	人喰い鬼 Orca	人喰い鬼 Orca (王子)	人喰い鬼 Orco (王子)
援助者	王子	王子 人喰い鬼 Orca	王子 人喰い鬼 Orco
超自然的な力	三つのどんぐり	四つの魔法のびん	五つの魔法のびん
課題	なし	仔犬のしつけ	なし

と援助者の役割は明確に分担され、一面的であるがゆえに、各要素が機能的につながり全体としての調和を生んでいる。サルデーニャの話ではとりわけ敵対者が否定的側面と肯定的側面を含んだ存在であるため、完全に排除（殺される）ことなく、自分の住む世界へ撤退するのである。超自然的な力についても、主人公を敵対者から助けるという役割は同じだが、その属性にズレがみられる。つまり「ペトロシネッラ」の方は、植物の実からでた地上の動物という移動する個体が使われるのに対して、サルデーニャの話には液体からでた「動かぬ」物質（自然）が敵対者を阻むのである。こうした違いが何を意味するのか、それはあとでゆっくり考察することにして、ここでは物語を外から見ることに専念する。

では次に、物語の展開パターンをみてみよう。発端→展開→結末を軸にして整理すれば、サルデーニャの話は母親からの娘の分離、監禁をへて、侵入した王子に救出され結婚するという直線的な展開がみられない（表2）。人喰い鬼の住む世界を「あちら」とすれば、「ペトロシネッラ」の主人公は一気に「こちら」へ帰還、王子との結婚をもって「こちら」に統合される。特殊なものが「こちら」側の力によって打ち砕かれ、平均化されているとも言える。一方サルデーニャの話では、「あちら」と「こちら」の境界上に主人公はとめおかれ、「あちら」的なものと「こちら」の緊張関係を内包したまま、「こちら」に統合される。特殊なものは「なだめられ」、集団内に取りこまれるのである。もちろん基本的には、サルデーニャの話が分離統合の物語パター

表 2

AT310	ペトロシネツラ	S1	S2
発端 禁を破る 約束	妊婦が人喰い鬼の菜園からパセリを盗んで食べる →お腹の子をわたす約束	妊婦が泉に水を汲みに行く途中で人喰い鬼に会う →お腹の子をわたす約束	妊婦が人喰い鬼の菜園からセロリを盗んで食べる →女の子が生まれたらわたす約束
展開 1 監禁 1a 禁止	七歳になった娘は人喰い鬼に高い塔に閉じこめられる	成長した娘は人喰い鬼の家に連れていかれ、二つの部屋以外のすべての部屋の鍵をわたされる	成長した娘は人喰い鬼の住むヌラーゲに連れていかれ、一つの部屋を除いたすべての部屋の鍵をわたされる
2 禁を破る	王子が娘の髪をつたって塔に入る	娘は負傷者の部屋で王子を見つけ、魔法の軟膏で傷を治す	娘は死者の部屋で王子を見つけ、魔法のびんで蘇生させる
3 逃走	娘と王子の逃走	娘と王子の逃走	娘と王子の逃走
4 対決	追いかける人喰い鬼を魔法のどんぐりで殺す	追いかける人喰い鬼を魔法のびんを使ってふりきる	追いかける人喰い鬼を魔法のびんを使ってふりきる
5 監禁		娘の顔は人喰い鬼の呪いで猫になり、王子に閉じこめられる	娘の顔は人喰い鬼の呪いで猫になり、王子に閉じこめられる
6 和解		人喰い鬼のくれた軟膏で元の顔にもどる	人喰い鬼のくれた魔法の水で元の顔にもどる
7 王の課題		仔犬のしつけ	
結末	王子と結婚	宮廷に迎えられる	宮廷に迎えられる

ンから逸脱しているわけではない。ただ、「ペトロシネツラ」のように主人公が「娘」から「女」になると同時に、「あちら」的なものを「こちら」から完全に切断する厳格さ、「あちら」と「こちら」の峻別があまりないようにみえる。サルデーニャの話の主人公が「あちら」的なものから完全に分離されぬことを示したうえで、「こちら」に迎えられるということは、「こちら」に「あちら」的なものを内包する存在のまま受容されることになる。たとえ「あちら」的なものが隠され、表面的には見えないとしても、主人公は両義的な存在のまま「こちら」に統合され、物語は終わるのである。このような展開パターンは、明確に「分類」「分割」されない存在を暗示しているので

はないだろうか。そうした「両義的な」ものの正体をつきとめるべく、さらに森の奥へ進んでみよう。

人喰い鬼の娘とふたつの顔をもつ女

この分離統合の物語の背後には何が潜んでいるのだろうか。主人公、敵対者、援助者、超自然的な力をしかるべく配し、しかるべき関係をもたせ、その目的に達しようとする「物語の意図」、すなわち「主題」は何なのか。すでに「塔のなかの娘」型の民話をめぐって、民族学的な視点や精神分析学的な視点からさまざまな解釈がなされている。例えば、民話に古い儀式や習俗の残存をみつけ、無知と未熟から脱して成人へ移行する儀礼の構造が示されているという解釈、民話を人間の心の深層構造と捉え、無意識と意識の葛藤、あるいは無意識をしたがえる自我の問題が示されているという解釈がある。しかしここでは、そのような「大きな」主題に挑むつもりは毛頭ない。サルデーニャの民話の背後にあって、人喰い鬼と主人公に両義的なイメージをもたせ、有限的なもの（人間）に無限的なもの（異界）を融和させる展開パターンを強いるものは何なのか。要するに、そのように仕向けるサルデーニャ社会の固有の論理とはどのようなものなのか、それが知りたいのである。個別の「昔話というガラス玉」を覗きながら、伝承している社会の人びとの「現実」と無縁ではない、サルデーニャの二つの話を貫く「主題」に少しでも近づくことが目的である。

ではさっそく、対立項として物語の展開の中心となる人喰い鬼と娘の行為を空間移動に注目して整理してみよう（表3）。すべての行為は①日常的空間から非日常的空間への移行にかかわる行為、②非日常的空間での停滞にかかわる行為、③非日常的空間から日常的空間への移行にかかわる行為、④日常的空間への復帰にかかわる行為、という四つに分類される。サルデーニャの二つの話を特徴づけているのは、③④に属する行為である。とすれば、人喰い鬼と主人公に両義的なイメージをあたえ、対立項の融和をもたらすものを見つける手がかりは③④の一連の行為にあるはずである。

表3

日常的世界 A, 非日常的世界 B, 境界 C

空間移動	人喰い鬼 Orco, Orca	主人公 Maria, Marietta
A → B	拉致する	拉致される
B	閉じこめる 禁じた部屋以外のすべての部屋の 鍵をわたす	閉じこめられる 禁じられた部屋以外のすべての部 屋の鍵をもらう
B → C	追いかける 撤退する	逃げる 阻止する
C → A	援助する	依頼する

③④の行為を読み解く準備として、日常的世界から引き離された娘の行く先とそこからの逃走の原因を確認しておくのも無駄ではあるまい。人喰い鬼と出会う場所として、現実の村の空間で「境界性」を帯びたところが選ばれていることから、セロリの菜園や泉は非日常的世界の入り口が可視化されたものと言える。人喰い鬼の菜園に生えるセロリは土地の言葉では Appiu と言い、湧き水のある湿地に自生する植物で死者とのかかわりが深く、泉は洞窟に住むと言われる jana 妖精との結びつきが強い。いずれも「地下世界」とのかかわりを連想させるものが選定されていることから、二つの民話の非日常的世界は地下世界であると考えられる。となれば人喰い鬼は、ハデスのように冥府に君臨する地下世界の支配者である。そして地下世界のすべての部屋の鍵を握り、いくつもの魔法のびんを所有している人喰い鬼は、絶対的な「あちら」の力の象徴である。

さて、圧倒的な力によって地下世界に閉じこめられ、「あちら」の力の鍵をにぎることになった娘に大きな転機がおとずれる。「禁を破る」という自らの行為によって、人喰い鬼の地下世界を突破しなければならない状況に自らを追いやってしまうのである。禁じられた部屋（「死者の部屋」「負傷者の部屋」）に入ったことが③の行為へ娘を向わせるわけだが、娘に一体どんな変化がおこったのだろうか。地下世界にとめおかれる娘は、人喰い鬼にすべての部屋の鍵をわたされぬ娘、「死」（禁じられた部屋）を知らぬ、無知なままの娘である。ところが、娘は自ら禁を破ることによって未知だったものを「知る」。この娘の変化は、「生死の未分化状態」から「生死の分割」への移

行と捉えることができる。この場合の「生」「死」は、「こちら」に属するものと「あちら」に属するものの象徴であり、娘は二つが混沌としている状態の象徴である。そして「知ってしまった」娘は混沌を喪失した状態から、王子を魔法のびんの力を使って回復させることによって秩序をもった状態へ移行する。混沌は危険なものとして「閉じこめられる」が、混沌から「秩序」が生じれば、それはもはや「閉じこめる」必要のないものとなる。非日常的世界から日常世界への移動は娘のこうした状態変化と平行な関係にあると言ってよい。

拉致された娘の行く先が地下世界で、③④の一連の行為の原因がそこでおこった娘の状態変化にあることはすでに述べた。「生死の分割」を成し遂げた娘が、追いかける人喰い鬼を抹殺して「こちら」へもどれば、めでたしめでたしだが、サルデーニャの二つの話では非日常的世界と日常的世界のせめぎあいが続くのである。人喰い鬼は娘の投げる魔法のびんに阻まれて撤退、「あちら」的なものが完全に切断されないまま、娘は猫の顔になって境界にとめおかれてしまう。「ペトロシネッラ」のように、人喰い鬼は娘の投げたどんぐりからでる動物に呑みこまれ、娘から完全に断ち切られることはない。それで娘は王子とともに一気に日常的世界へ脱出できず、境界でふたたび「閉じこめられる」ことになる。そしてこの猫の顔をもつ娘が日常的世界にもどるためには、どうしても人喰い鬼の力をかりなければならない。このような境界上の娘と「あちら」の力の二面性は、人喰い鬼－撤退－援助／娘－阻止－依頼の行為の連鎖と不可分である。

では、この一連の行為を非日常的世界と日常的世界のせめぎあう境界と関連づけて考えてみよう。人喰い鬼が撤退を余儀なくされるのはそこに「隔たり」ができるからである。「生死の未分化状態」の娘と人喰い鬼を隔てるものはないが（金色の髪がつながりを示す）、「生死の分割」を成し遂げ、混沌から秩序をえた娘は、もはや「人喰い鬼の娘」ではない。もっともこの場合の「隔たり」は絶対的なものではないので、人喰い鬼は娘を追いかけるのである。人喰い鬼と娘の間に決して埋められぬ「隔たり」が生まれるのは、娘

が魔法のびんを次々に投げつけるときである。もともと人喰い鬼の所有物だった魔法のびんを盗んで逃げるのだから、娘は「あちら」の力と完全に切れてはない。しかし娘が自ら魔法のびんを手放せば、「あちら」の力を捨てることになる。「あちら」の力と絶縁してはじめて、絶対的な「隔たり」が生まれ、人喰い鬼の追跡が阻まれるのである。

この魔法のびんからでてくるものは、洪水、いばらの茂み、火(ギラルツァ村の話ではこれにオリーブ油が加えられている)である。すべて動かぬ物質(自然)、「あちら」に属するものばかりである。しかるべく配置された超自然的な力は、娘の「あちら」的なものの視覚化にはほかならない。

人喰い鬼は絶対的な「隔たり」を越えられないが、娘を「あちら」側にふりむかせることによって呪いをかける。娘の顔は猫になり、こんどは娘と王子(日常的世界)に「隔たり」ができてしまう。つまり娘は、「こちら」と「あちら」的なものをあわせもつ存在ゆえに、人喰い鬼からも王子からも隔てられるのである。この時点で娘は「ふたつの顔をもつ女」になったと言ってもよい。非日常的世界にいるためには「人喰い鬼の娘」でなければならない、日常的世界にもどるためには「成人女」でなければならない。このような両義的な女は、そのどちらの世界からも隔てられた存在である。また「隔てられた女」は、ふたつの異なる世界の分断と同時に結合を暗示する存在でもある。猫の顔になった娘はしかるべく境界にとめおかれるのはこのためである。

ところで、「こちら」からも「あちら」からも隔てられ、「ふたつの顔をもつ女」となった娘は、何を意味するのであろうか。猫の顔が「あちら」の力の象徴だとすれば、女性に内包されるものすごい力＝「母なるもの」であろう。それは子を産み育てるプラスのイメージをもった優しい母ではなく、何か恐ろしい力としてイメージされたものである。「母なるもの」の否定的側面と言いかえてもよい。そうした否定的側面は聖なるものと同様に、隠されているからこそ発見される。娘の顔が猫になるというのはまさしく、恐ろしい「母なるもの」が顕現したことを示している。「ふたつの顔をもつ女」は、「母なるもの」の両義性が具現化されたものにほかならない。そして「母な

るもの」の否定的側面は、継母、老婆、魔女などによって客体化されず、ひとりの娘のなかに内包させたまま提示されるサルデーニャの民話は、超自然的な力を厳格に分離区別しない志向をもっていると言える。主人公の娘の名前が「マリア」「マリエッタ」であるのは単なる偶然ではなからう⁽⁷⁾。

さて、ふたたび話を人喰い鬼と娘の行為にもどす。「ふたつの顔をもつ女」になった娘は「隔たり」を解消するために、人喰い鬼の力をかりるのである。これまで否定的なイメージをもっていた「あちら」の力がここで一転してプラスの力になる。敵対者であった人喰い鬼が援助者になり、娘の顔を元にもどす魔法の軟膏や水を与えるという行為には、「あちら」の力の両義性が示されている。災厄は積極的に「あちら」から「こちら」にやってくるもの、幸いは積極的に「こちら」から「あちら」に働きかけて得られるもの、という図式は、人喰い鬼の行為とぴったり重なる。人喰い鬼はプラス、マイナス双方の力を行使する稀有な存在である。一般的にキリスト教世界では、「あちら」の力は聖なるものと邪悪なものに完全に分割され、厳密に区別される。ところが、サルデーニャの二つの話にはそうした峻別が欠けている。つまり「あちら」の力は、「聖なるもの」であると同時に「邪悪なもの」でもある、という認識が根底に流れている。

「ふたつの顔をもつ女」は、人喰い鬼のおかげでやっとふつうの「成人女」にもどることができ、日常的世界へ統合される。そのさいに猫の顔は「切り落とされる」のではなく、魔法の軟膏や水をつけられて元の顔が蘇る。言い換えれば、「あちら」的なものを完全に抹消するのではなく、元のように「隠された」状態にもどしただけである。これは対立項の一方が他方に統合され、新たなものになる上昇志向型ではなく、拮抗する対立項が融和して元にもどる安定志向型と言えるかもしれない。サルデーニャの二つの話がどちらも、「成人女」にもどった主人公を「迎える」結末となるのは、まさに異なるものを「融和」させ、平均化して集団内に取りこもうとする社会の志向と無縁ではない。

むすびにかえて

「塔のなかの娘」をめぐるサルデーニャの二つの話を貫く「主題」をもとめて、人喰い鬼と娘に導かれて深い森のなかをさまよってきた。果たしてこれが出口と言えるのかは別として、なんとかサルデーニャの二つの話の特徴とそこにある固有の論理にたどりつけたように思う。非日常的世界（無限なもの）は日常的世界（有限なもの）から完全に分離区別された「隔たり」をもつものではなく、日常的世界に内包されたまま眠っているようなものとしてサルデーニャ社会では認識される。デリタラ篇の民話に継母、老婆、魔女といった否定的イメージに固定された一面的な存在があまりみられないのは、そのためである。本稿で取り上げた二つの民話でも、両義的な存在や対立項の融和がきわだっている。主人公、敵対者、援助者、超自然的な力はすべて、物語にこのような特徴を与えるべく配され、動かされている。とりわけ人喰い鬼と娘の両義性は興味深い。人喰い鬼は非日常的世界に属するもの、「あちら」の力の象徴として示されるのだが、敵対者としての否定的イメージに縛られない二面性をもっている。また娘の方も、日常的世界に属するものでありながら、「ふたつの顔をもつ女」という両義的なイメージをおびている。人喰い鬼の「あちら」の力にしろ、娘の「母なるもの」にしろ、プラスとマイナスに分割されても、それが別個の存在として客体化されず、プラスとマイナスが融和されている。もっとも、「あちら」の力にはプラス、マイナスの混在がみられるが、「母なるもの」は日常的世界では、マイナスが隠されている。それはちょうど聖人と病気が結びつけられること、「母なるもの」のイメージが聖母マリアに収斂することに似ている。

二つの民話という「ガラス玉」にうつっているのは、対極にあるもの、異なるもの、異質なものを完全に排除するのではなく、「なだめて」融和させ、集団内に取りこもうとするサルデーニャ社会の志向性ではないだろうか。民話の森は奥深いうえに霧がかかっており、迷い込んだら出口を探すのは至難のわざである。明快な解釈とはほど遠いかもしれぬが、「塔のなかの娘」をめぐる旅はここで終わりにしておこう。先を急ぐつもりはないが、また新た

な導き手を森の入り口でいつまでも待たせてはおくわけにはいかないのである。

註

- (1) 「イタリア民間伝承誌」 *Rivista delle tradizioni popolari italiane* は De Gubernatis が中心となって発刊された。「民間伝承研究のための採集資料」は Pitre, Salmone Mariano のふたりの仕事である。
- (2) Comparetti は D'Ancona とともに「イタリアの民謡と民話」 *Canti e racconti del popolo italiano* のシリーズを刊行(1870-1891)、『イタリア民話』の仕事はその流れをくむものである。
- (3) Comparetti のもとに寄せられた手稿、刊行された書物などが博物館に寄贈された経緯は定かではないが、おそらく1911年当時イタリア民族学会の会長であった Loria に贈られたものとされる。
- (4) カルヴィーノは博物館所蔵の「コンパレッティ文庫」をおおいに参考にしたと『イタリア民話集』(1956)の註釈で述べている(Introduzione XXXIV, 5)。Francesco Lorgia が採集した10話のうち2話 *L'erba dei leoni*, *Il convento di monache e il convento di frati* を収めている。
- (5) 105話のうち82話が AT に分類される。
- (6) 「ペトロシネッラ」

妊婦のパスカドツィアは人喰い鬼(Orca)の菜園からパセリを盗んで食べ、怒った人喰い鬼にその代償としてお腹の子を要求される。パスカドツィアは胸にパセリがはえた女の子ペトロシネッラを生むが、七歳になると人喰い鬼に連れ去られてしまう。人喰い鬼はペトロシネッラを入り口も階段もない、窓がひとつだけしかない塔に閉じ込める。ある日のことペトロシネッラがみごとな長い髪を窓から垂らしていると、王子が通りかかり彼女を一目みただけで心を奪われる。王子はペトロシネッラの長い髪を使って塔に出入りをするようになり、ペトロシネッラを連れて逃げる。ふたりを追いかける人喰い鬼に、ペトロシネッラはあらかじめ盗んでおいた魔法のどんぐり三つを次々に投げつける。人喰い鬼はどんぐりから現れた恐ろしい犬、獐猛な獅子から逃れ、ふたりを追い続けるが、三つめのどんぐりから現れた狼に呑みこまれて死ぬ。難を逃れたペトロシネッラと王子は結婚する。

「ラプンツェル」

身ごもった女は裏窓から見える妖精の庭に生えるラプンツェルが欲しくてたまらなかった。見かねた夫は妖精の庭に忍びこみラプンツェルを取ってくる。怒った妖精は夫に

生まれてくる子をその代償に要求する。夫婦に女の子ができると、妖精はすぐにやってきてその子をラプンツェルと名づけて連れ去ってしまう。ラプンツェルは十二歳になると高い塔に閉じこめられ、妖精がつたって登れるように、みごとな長い髪を窓から垂らさなければならなかった。ある日のこと、この塔のある森に王子がやってきて、ラプンツェルの美しい歌声に心を奪われる。王子は高い塔にのぼる妖精をみて、そのまねをして塔に出入りをするようになり、ラプンツェルを孕ませる。怒った妖精はラプンツェルの髪を切って荒地に放りだしてしまう。王子はいつものように塔にのぼり、ラプンツェルではなく妖精がそこにいることに驚き、塔から身をなげて両目をなくす。王子は荒地をさまよい歩き、子どもたちと惨めな暮らしをするラプンツェルに再会する。ラプンツェルの涙で王子の目が見えるようになる。

- (7) バジーレやグリムの話では、娘の名は「パセリ」という植物である。AT310型の話の主人公にはローズマリー、セロリ、パセリ、ウイキョウなどの植物の名がつけられている。

参 考 文 献

LÜTHI, Max

- 1969 『ヨーロッパの昔話－その形式と本質－』（小澤俊夫訳） 岩崎美術社
 2001 『民間伝承と創作文学－人間像・主題設定・形式努力－』（高木昌文訳）
 法政大学出版局

河合隼雄

- 2002 『昔話と日本人の心』 岩波書店

吉原高志・吉原素子篇訳

- 1998 『初版グリム童話集』 白水社

AARNE, Antti THOMPSON, Stith

- 1961(1973) *The Types of The Folktale* Indiana University

DELITALA, Enrica

- 1999 *Novelline popolari sarde nell'Ottocento Edizione dei manoscritti del Fondo Comparetti* voll.2 AM&D Edizioni

- 2000 *Fiabe e Leggende nelle tradizioni popolari della Sardegna* Carlo Delfino Editore

APRILE, Renato

- 2000 *Indice delle fiabe popolari Italiane di magia* voll.2 Leo S. Olschki Editore

CALVINO, Italo

- 1956(1971) *Fiabe italiane* Einaudi
 1988 *Sulla fiaba* Einaudi

BASILE, Giambattista

1986(1995) *Lo Cunto De Li Cunti* (testo restaurato della prima edizione napoletana del 1634-1636, traduzione italiana di Michele Rak) Garzanti